

トンネルを抜けた先に

025 長野工業高等専門学校 旅・鉄道研究同好会

『トンネルを抜けると、そこは雪国であった。』

これは、かの有名な川端康成の小説『雪国』の一節である。

煌々と輝く電灯が駅のホームを照らす中、私は物思いに耽っていた。

50年前までこの駅は地上にあったそうだ。一体、どんな雰囲気だったの
だろう。少なくとも、こんなに暗くはなかったはず。

突然、「ゴオオオオオ！！」と恐ろしい音が鳴り響いた。私はあたりを
見回す。轟音と暗闇を切り裂く一閃のライトを灯して電車がやってきた。
いかにも古そうな車両だった。車体の傷と輝きは、これまでにさまざまな
思いを運んできた証なのだろう。

「ピンコーンピンコーンピンコーン」という聞き慣れない音とともに、ド
アが閉まる。すると電車は自我を持ったかのようにぐんぐんと速度を上げ
ていった_____。

今日も、この電車は走り続ける。人々の思いを運びながら。夢を運びなが
ら。

そのとき、電車はトンネルを抜けた。